宇隆１遺跡発掘調査報告書

－北海道勇払郡厚真町－

２０１６年３月

宇隆１遺跡発掘調査団

科学研究費補助金「平泉研究の史料学的再構築」
（研究代表者　柳原敏昭）

例　　言

1．本書は、平成26年に行われた、宇隆1遺跡（北海道勇払郡厚真町宇隆地内）の発掘調査報告書である。

2．本書は、平成27年度　科学研究費補助金　基盤（B）「平泉研究の史料学的再構築」（課題番号25284120／研究代表者：柳原敏昭東北大学大学院教授）の成果である。

3．発掘調査参加者　飯村均（福島県文化センター）、池谷初恵（伊豆の国市教育委員会）、乾哲也（厚真町教育委員会）、及川真紀（奥州市教育委員会）、狭川真一（元興寺文化財研究所）、七海雅人（東北学院大学）、奈良智法（厚真町教育委員会）、羽柴直人（岩手県立博物館）、堀祐（東北大学）、村木二郎（国立歴史民俗博物館）、八重樫忠郎（平泉町）、柳原敏昭（東北大学大学院）、山口博之（山形県立博物館）

4．発掘調査期間は、平成２６年１０月２日（木）～５日（日）。調査面積は１１０㎡。

5．本書は、八重樫と山口が執筆した。

6．本書の編集は、八重樫が行った。

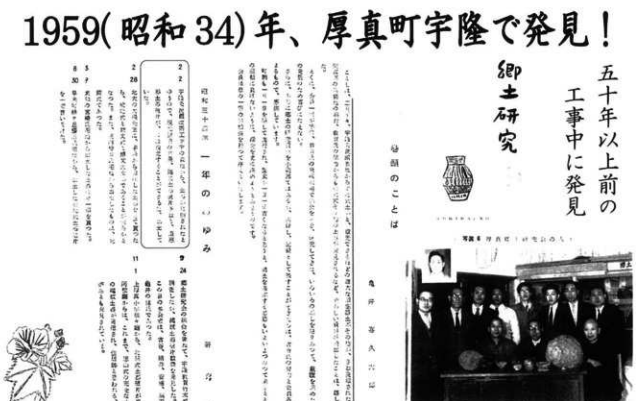
目　　次

例言・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
目次・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
Ⅰ　調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
Ⅱ　出土した壷の所見・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
Ⅲ　調査区の位置・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
Ⅳ　調査結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
奥州藤原氏をめぐる陶磁器の様相・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
Ⅰ　はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
Ⅱ　奥州藤原氏の陶磁器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
　１国産陶器と貿易陶磁器の様相・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０
　（１）国産陶器の様相・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０
　（２）貿易陶磁器の様相・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１２
　　①１２世紀代を中心とする様相・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１２
　　②１３世紀～１６世紀代の様相・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１３
　　③全体的な様相・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１３
Ⅲ　まとめにかえて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１４

Ⅰ　調査に至る経緯

1959（昭和34）年、厚真町字隆の公民館建設現場から、1点の壷が発見されている。その壷は、顧みられることはなく、施設の片隅にひっそりと置かれていた。再発見の経過は以下のとおりである。

昭和34年2月2日　宇隆公民館建設中に発見。
昭和47年12月　厚真町郷土研究会作成の町内遺跡一覧表に「17 宇隆 公民館敷地内 前北式、擦文式、刻文式、須恵器」と記載。
昭和54年9月　北海道教育委員会による一般分布調査によって登載
平成20年1月　東海大学 准教授 松本建速氏　中世陶器の可能性が高いことを指摘。また口縁部打ち欠き、遺跡の立地から奥州藤原氏の経塚関連の資料を示唆。
平成21年11月　青森市教育委員会　木村淳一氏　厚真町の資料実見。中世陶器の可能性を指摘。写真数枚を撮影し、詳細写真等の諸データ郵送の依頼。
平成21年12月8日　岩手県平泉町役場　八重樫、画像データの所見を送る。
平成22年8月28日、岩手県平泉町役場　八重樫来町。実見。
以下は、広報紙の記事


1959(昭和34)年、厚真町宇隆で発見！

五十年以上前の工事中に発見

郷土研究

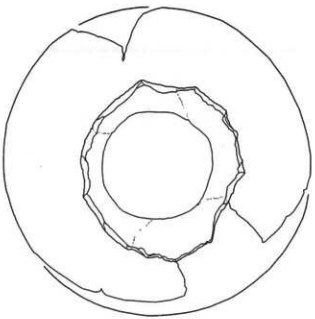
『厚真村古代史』より

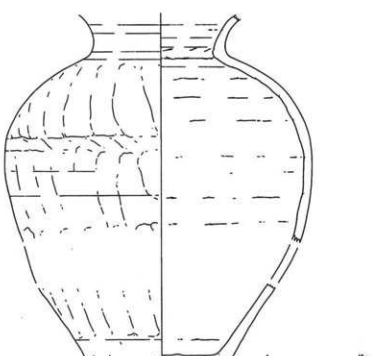
以上により、常滑壷が発見された宇隆Ⅰ遺跡について、経塚であった可能性も含め、どのような遺跡であったかについて、何らかの物証を得るために、再調査を行うこととした。

Ⅱ　出土した壷の所見

器高は 39 ㎝以上の中型壷、底径は 15.4 ㎝、砂床、最大胴径 34.0 ㎝、口径 21 ㎝以上、自然釉がかかる、押印はなし、若干なで肩、口縁はラッパ型に開く、縦ヘラケズリの後横ヘラナデ調整、胴部で鉄分が吹きだしている部分がある、内面の調整は常滑に似る。

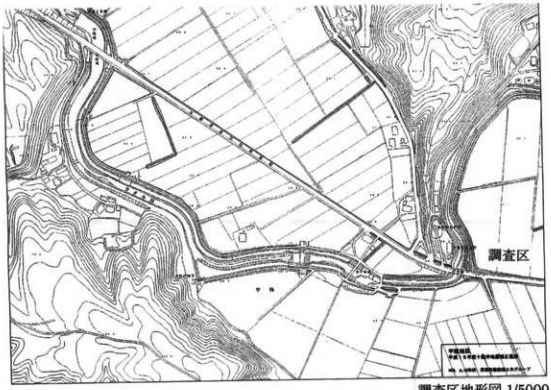
実見の結果、常滑編年 2 形式（1150 年～1175 年）の中型壷である。



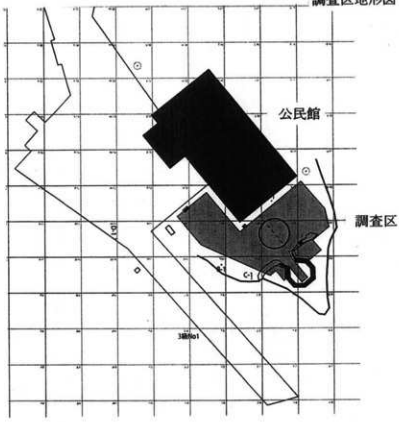


実測：瀬戸市埋蔵文化財センター　青木 修

Ⅲ　調査区の位置



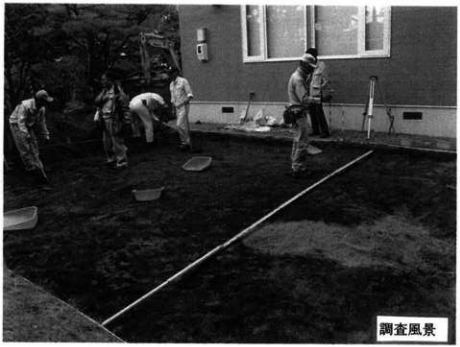
調査区地形図 1/5000



Ⅳ　調査結果

調査結果としては、攪乱が著しく、若干の擦文土器、縄文土器破片が出土したにすぎなかった。今後は、周辺に範囲を広げて踏査を進めていく必要がある。

調査風景



調査風景

現地公開

調査風景

四阿トレンチ（樽前Ｂ火山灰）

南側調査区

四阿トレンチ（樽前Ｂ火山灰）

四阿トレンチ

完掘写真（北から）

宇隆１遺跡発掘調査団

完掘写真（東から）

完掘写真（南から）

奥州藤原氏をめぐる陶磁器の様相

Ⅰ　はじめに

小稿では、本書の八重樫忠郎による宇隆１遺跡の考察をうけ、出土した常滑壺の存在を、奥羽の同時期資料の存在から探り、奥州藤原氏をめぐる陶磁器の様相を広範囲な視点から概観したい。なお付け加えれば、柳原敏昭を研究代表者としてすすめられている本科研「平泉研究の資料学的再構築」において、北海道までを通覧した考古学資料のさらなる集成的研究が現在進められており、奥州藤原氏をめぐる陶磁器の様相を示す資料の一層の充実が期待されている。

平泉藤原氏の基盤であった奥羽は、陸奥国と出羽国を統合した表現であり、現在の行政区分の東北６県、すなわち青森・秋田・岩手・山形・宮城・福島を指す。このうち陸奥国には青森・秋田の一部・岩手・宮城・福島の各県、出羽国には秋田の大半・山形の各県が含まれる。両国は奥羽山脈により地形的にも隔絶されている。おおきくは日本海側の出羽国と太平洋側の陸奥国の２地域に分かれ、地勢的にも政治史的にも独立的である。両地域にわたって勢力を有したのは、律令政権を除けば、12 世紀代の奥州藤原氏以外にはない。また奥羽全体の面積が約 66,886k ㎡であることからすれば、この地域は国土の約 18％を占めている。なお、北海道を含めてその面積を算出すれば約 150,338k ㎡となり、国土の約 40％にあたる。この広大な地域は、決して一様なものではなく、地理的にも文化的にもいくつかの小地域に分れ、それぞれは地域性を有している。中世奥羽の土器・陶磁器の様相（国内産土器・陶器の生産と流通の様相、日本国以外に生産地を持つ貿易陶磁器の流通の様相）についても壺甕の様相などには地域差が生じている。

Ⅱ　奥州藤原氏の陶磁器

厚真町宇隆１遺跡から出土した常滑壺は、従来の常滑の分布域を北海道まで広げるのみならず、経塚造営に使用されたのではないかなどという可能性が指摘された。

さて、奥州藤原氏の拠点である平泉遺跡群から見いだされる主要な陶磁器の器種構成を、八重樫忠郎は「平泉セット」と呼び、その分布から平泉藤原氏との深い関係を読み取ろうとした。平泉型の手づくねかわらけ、常滑２～３形式、渥美、水沼、白磁をその構成内容とし、「これらを有しているということは、平泉同様の饗食儀礼を行っていた」ということになるという。しかしながら、平泉セットに併行する時期の出羽の陶磁器組成は、白磁碗＋須恵器系陶器＋かわらけ、と在地産須恵器系陶器から組成され、「平泉セット」との落差を生じるが、瓷器系陶器の不在を、須恵器系陶器と瓷器系陶器の分布範囲の違いと見れば、そのほかの組成は一致している。手づくねかわらけや白磁は、形態の差はあるがこの時期に奥羽に広域に展開する。こうしたことからすれば、八重樫の提示した「平泉セット」は、より広域に展開する（手づくねかわらけ＋白磁）と、主として太平洋岸に展開する（常滑２～３形式、渥美、水沼、花立）製品の２つの要素とに分けることができる。奥羽の全域に分布するのはこのうちの最初の要素、手づくねかわらけと白磁の一群であり、この組成は北陸地方から近畿地方へと連続する。壺甕類の大型品の種類は水運を中心とする輸送手段を取ることからか、太平洋側と日本海側に分かれる。

今回厚真町で常滑壺が出土したことは太平洋側での出土であるため、分布域（日本海側には須恵器系陶器、太平洋側には瓷器系陶器）の延長、つまり平泉藤原氏時代の流通路の一方があったことを示すと見ることも可能である。北海道では少ないものの本州島と同様な 12 世紀代の瓷器系陶器と須恵器系陶器が分布することは重要である。興味深いことにこれらはいずれも袋物（コンテナ）であり、

内容物がもたらされ、この地からは何らかのものが見返りとして運ばれたことを暗示する。おそらくそれらは、記録に見える「水豹の皮」など北方の産物なのであろう。なお、北海道からは 12 世紀代に編年される白磁の出土は出土が予想されるものの未だ報告されていない。

1　国産陶器と貿易陶磁器の様相

さて、こうしたことを念頭に、東北地方での国産陶器と貿易陶磁器の出土遺跡を検討してみたい。この地域を対象とする中世陶磁器についての研究は、吉岡康暢(吉岡康暢 1994『中世須恵器の研究』)が北日本の流通に関係させながら、当地域の陶磁器の流通について、北海道地域も含め通覧している。国立歴史民俗博物館を中心とした、貿易陶磁器の出土遺跡集成では、文献に現れたこの地域の貿易陶磁のみならず、国産陶磁の集成も併せ行われている(小野正敏ほか 1994「日本出土の貿易陶磁器 - 東日本編 1 -2-『国立歴史民俗博物館資料調査報告書』5)。桜田隆・利部修は秋田県内で出土した貿易陶磁の集成をし、「「中世城館」と集落跡から出土したものが多いが、その出土量は極めて少ない。」と報告している（桜田隆・利部修 1997「秋田県の貿易陶磁」『東北の貿易陶磁』)。高橋博志は陶磁器の陸奥側の事例について報告を行っている（高橋博志 2002「陶器生産と陶磁器流通」『鎌倉・室町時代の奥州』)。八重樫忠郎は平泉の出土事例を視点に据えながら、奥羽の貿易陶磁器の出土事例について集成している（八重樫忠郎 2001「東北における中世初期陶磁器の分布」『都市平泉―成立とその構成―』)、山本信夫は平泉の出土陶磁器と大宰府出土陶磁器の比較を行い、平泉には大宰府のC期である 11 世紀後半～12 世紀前半に一定量の陶磁器が入ったと整理した。さらにその流通ルートは陶器を指標として見た場合、大宰府→平安京→平泉と動くという（山本信夫 2001「11・12 世紀平泉の貿易陶磁と京都・太宰府」『都市平泉―成立とその構成―』)。博多から日本海ルートをそのまま動くことはないという指摘は、貿易陶磁器の流通ルートも同様であると見てよかろう。貿易陶磁器は当然ながらその生産地は海外であり、日本には海路輸入によりもたらされる。これらは奥羽全体に分布し編年観が確立している。その性格上数量や器種に消費者の嗜好などの傾向性が反映される可能性もあるが、ひろく平泉藤原氏とアジア各地との広域比較などを行う場合有効な指標となりうる。まず国産陶器の様相を把握し、次に貿易陶磁器の様相を整理したい。

（1）国産陶器の様相

中世奥羽では日本国内に広域流通する、珠洲・常滑・渥美などの遠隔地製品が供給され、遺跡で出土する基本的な器種（壺・甕・擂鉢）は広域流通品で構成されている。日本海側には須恵器系（珠洲などの還元炎焼成のやきもの）陶器が分布し、太平洋側では常滑あるいは渥美の瓷器系陶器（常滑などの酸化炎焼成のやきもの）が卓越する。奥羽山脈を挟んだ両地域の陶器の分布は、平泉遺跡群などの場合を除いて、基本的には排他的であり干渉しない。とくにこの傾向は瓷器系陶器に強い。つまり太平洋側には須恵器系陶器は主たる分布を示さず、同様に日本海側には常滑・渥美は基本的に分布しないのであり、両者の流通圏はその主たる経路を別々に形成している。これに対して瀬戸は両地域に分布していることは非常に興味深い。これはこの地域に古代以来もたらされる貿易陶磁器の分布と相応するのである。またこの地域では陶器窯の開窯も積極的に進められ、初源は平泉藤原氏の時期にかかる。

中世奥羽の陶器生産の様相について簡単に触れれば次のようになる。藤沼邦彦は 1970 年代から 80 年代に宮城県域を主として資料の発見と蓄積に努めた(藤沼邦彦 1977「宮城県出土の中世陶器について」『東北歴史資料館研究紀要』第 3 巻)。飯村均はその後 90 年代に福島県域と日本海側の資料を追

加し、資料の編年的・技術的理解を深めた（飯村均 1995「東北諸窯」『概説中世の土器・陶磁器』）（飯村均 2003「総論」『中世奥羽の土器陶磁器』）。ついで平成 19 年には平泉藤原氏のおひざ元から陶器窯（花立窯）が発掘された。八重樫忠郎はこれを 12 世紀第 1 四半期と位置づけ整理している（八重樫忠郎 2010「平泉藤原氏の陶器窯」『兵たちの生活文化』）。ただしこの窯の製品は広域には流通していない模様である。奥羽の中世陶器窯は瓷器系の「梁川窯」「大戸窯」「伊豆沼窯」「三本木窯」「白石窯」「執行坂窯」（常滑系）、同じく瓷器系の愛知県渥美半島渥美窯の技術を受け継いだ「水沼窯」（渥美系）「花立窯」（渥美系？）、須恵器系の「エヒバチ長根窯」「大畑窯」「新溜窯」（珠洲系）、当初は珠洲系の焼造技術で焼造しながら、後には常滑系の技術を用いて、焼造する「飯坂窯」「大戸窯（葭ノ沢支群）」がある。太平洋側には「瓷器系中世陶器」の技術伝統を継承する窯跡群、日本海側に「須恵器系中世陶器」の技術伝統を継承する窯跡群が主として分布する。

平泉藤原氏と関係の深い水沼窯は、渥美の技術を直接導入したという窯である。渥美窯製品との型式比較により 12 世紀第 2 四半期の年代が考定されている（藤沼邦彦ほか 1984「水沼窯跡発掘調査報告」『石巻市文化財調査報告書』第 1 集）。その分布は、おもに陸奥の中部の北上川沿岸部である、岩手県平泉町周辺と宮城県多賀城市などを分布域とする。これらはいずれも陸奥の拠点的遺跡である。水沼窯は操業は短期間だが、奥州藤原氏か関与した窯と考えられ、渥美からの直接的な技術導入も政治的な関係から行われるという（藤沼邦彦 1992「石巻市水沼窯跡の再検討と平泉藤原氏」『石巻の歴史』第 6 巻）。田中則和は、平泉遺跡群の中で水沼窯製品と報告があるものを紹介し、柳之御所 27・29 次調査での国産陶器出土点数は、総数 7,340 点のうち、渥美 3,865 点（53％）、常滑 3,034 点（41％）、須恵器系陶器 418 点（古代を含む、6％）、水沼窯製品 23 点（0.003％）と整理し、周辺古社との関連性も指摘した（田中則和 2003「水沼窯跡」『中世奥羽の土器・陶磁器』1）。確かに水沼窯製品の平泉遺跡群での出土数は少ない。しかしながら平泉藤原氏と深い関係にあったことも知られている。羽柴直人は青森県平内町白狐塚遺跡で採集した水沼窯製品について報告している（岩手県立博物館 2014『比爪―もう一つの平泉―』）。これもまた稀な事例であるものの、平泉藤原氏の北海道へのルートに連接し、厚真町の常滑壺の存在へと結びつくのだろう。

なおおなじく稀な事例とはなるが 12 世紀代に遡る瀬戸製品の出土もある。青森県市浦村に所在する山王坊遺跡は、著名な中世港湾都市十三湊遺跡との関連で周知される中世の寺院跡である。この周辺から骨蔵器として使用された釉掛けのある陶器製の四耳壷が出土している（山王坊跡調査団 1987「山王坊跡」『北方日本海の中世宗教遺跡研究第 1 集』）。骨蔵器は口縁部と底部の一部を欠くが、残存高は 25.1cm、頸部径 20.5cm、大きさ胴部最大径 20.5cm、高台部復元径 6.9cm であり、やや肩が張る器形となる無釉四耳三筋壷である。頸部が欠損し高台の大半も破損している。藤沢良祐によれば、この四耳壷は古瀬戸の生産のもっとも初期、古瀬戸草創期に編年され、12 世紀後半代の所産であるという（藤沢良祐 2001「埋納された古瀬戸製品- 特に大型壷・甕類を中心として-」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』XⅦ）。同様の製品は長野県埴科郡坂城町「観音平経塚」2 号墓坑出土骨蔵器がある（若林卓他 1999「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 21 ―上田市内・坂城町内―」『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』41）。この遺跡もまた墓地に関連する遺跡であり、2 例とも骨蔵器として使用されている。くりかえすが、奥州平泉氏の根拠地である平泉遺跡群の陶磁器の主体をなすのは、常滑や渥美、さらには貿易陶磁器である。山王坊で出土したような瀬戸製品は、平泉藤原氏の時代には一点も発見されていない。山王坊跡の所在する津軽地域は、平泉藤原氏に関係する 12 世紀代の遺跡が分布するところとして知られている。平泉藤原氏との関係を色濃く映し出していると見ることもできよう。

（2）貿易陶磁器の様相

日本国内で出土する貿易陶磁器の分類とその編年的位置、さらには画期については、山本信夫が大宰府の出土事例をもとに古代から中世後期までの貿易陶磁器を分類し、A期～G期までの7期に分類し、それぞれの時期と指標の陶磁器組成を示している（山本信夫 1995）。中世後期以降の貿易陶磁器の分類は、青磁については碗を中心として上田が行っている（上田秀夫 1982「14 ～ 16 世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』2号）。白磁については碗皿を中心として森田勉が行っている（森田勉 1982「14 ～ 16 世紀の白磁の分類と編年『貿易陶磁研究』2号）。染付については碗皿を中心として小野正敏が行っている（小野正敏 1982「14 ～ 16 世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』2号）。これらの先行研究に導かれながら奥羽の貿易陶磁器を概観すれば次のようになる。

古代にこの地域に流通したのは、越州窯系青磁を中心としながら、邢州窯系あるいは定窯系白磁さらには長沙窯系陶器を組成する陶磁器群であり、少量が官衙遺跡を中心として分布する。年代は9世紀代～11 世紀代を中心とし、おおむね平安時代にあたる。9～12 世紀代の貿易陶磁器は基本的に客体的存在であり、官衙あるいはそれに関連するような施設で使用される特殊品であった。いずれにしても、8世紀から 11 世紀までの貿易陶磁器の数量は非常に少ない。このあとを受けた、11 世紀代の貿易陶磁器もほとんど見ることができない。わずかに、青森県八戸市大仏遺跡で、住居跡から在地の土器にともなって出土した、大宰府分類XⅠ類の皿型をなす青白磁の存在が知られる程度である（八戸市教育委員会 2000「人首沢遺跡・毛合清水（3）・大仏遺跡」『八戸市埋蔵文化財調査報告書』第84 集）。なお、大宰府分類のXⅠ類は、東日本ではほとんどその存在を知ることができない。

中世に入り平泉藤原氏の時代に重なる 12 世紀の後半に年代が比定される白磁の段階からその流通量は徐々に増加し始め、13 世紀代の劃花文青磁碗や鎬連弁文青磁碗の段階になると、広く浸透し始める様子を見ることができる。量の多寡はあれ中世遺跡の調査では、多くの場合貿易陶磁器の出土を見る。貿易陶磁器がこの地域にもたらされる背景には、流通ルートの整備と土器・陶磁器の需要者側の要求などが、時代の推移とともに整理され、潤沢な供給量が保証されるようになった状況を見て取ることができる。

さて、12～16 世紀代の貿易陶磁器の様相を図表にもとに概観すれば次のようになる。なお、表は、国立歴史民俗博物館が集成した『日本出土の貿易陶磁器（東日本編1・2）』からから作製した（小野正敏他 1994「日本出土の貿易陶磁器」- 東日本編1 -2-『国立歴史民俗博物館資料調査報告書』5）。図については『日本考古学協会 2001 年盛岡大会研究発表資料』から、出土遺跡を陶磁器の種類毎に分け作製した。

①12 世紀代を中心とする様相

この時期は山本信夫のA期～D期に相当する。A期は8世紀末～10 世紀中頃、指標とする陶磁器は越州窯系青磁、長沙窯系青磁・黄釉褐彩陶器、定・刑窯系白磁などから組成される。B期は 10 世紀後半～11 世紀中頃、指標とする陶磁器は越州窯系青磁、白磁XⅠ類などから組成される。C期は 11 世紀後半～12 世紀前半、指標とする陶磁器は白磁碗皿と袋物などから組成される。D期は 12 世紀中頃～後半、指標とする陶磁器は白磁碗、龍泉窯系青磁碗などから組成される。これを奥羽にあてはめて考えれば、A期の陶磁器は秋田市の北から盛岡市を結ぶラインより南側に全体的に指標とする遺物の展開を知ることができる。B期の陶磁器はわずかに八戸市周辺にその存在を知ることができるがほとんど展開しない。C期の陶磁器はその後半期から白磁碗Ⅱ・Ⅳ類、さらには四耳壺などの袋物が広く展開し始める。D期の陶磁器は龍泉窯系碗1類を中心として展開を知ることができる。八重樫忠郎

はこれらの年代観について平泉遺跡群出土遺物と比較検討し、大宰府あるいは博多といった日本側の輸入拠点の年代観にやや遅れるが、全体としては調和的であるという（八重樫忠郎 1996「輸入陶磁器から見た柳之御所跡」『中近世土器の基礎研究』）。

北日本では白磁碗が拠点的遺跡で出土している。日本海側では白磁碗が拠点的遺跡で出土するのは同様であるが、加えて白磁四耳壺が出土する。太平洋側は出土数が格段に多い。器種も白磁碗・白磁皿・白磁水注・白磁四耳壺・白磁壺と多彩である。これは奥州藤原氏の拠点である平泉遺跡群が所在するためである。分布は奥羽全体に広がるが、絶対的な数量からすれば、太平洋岸に中心がある。こうした分布傾向は、これ以前の初期貿易陶磁器の分布傾向を引き継いだものであると見ることができる。八重樫忠郎は平泉遺跡群の 12 世紀代の貿易陶磁器の出土数量を整理している。柳之御所跡では 42,555 ㎡の調査面積で 2,173 点の貿易陶磁器が出土し、約半数は白磁四耳壺で占められる。志羅山遺跡では 17,532 ㎡の調査面積で 441 点、泉屋遺跡では 13,382 ㎡の調査面積で 279 点、毛越寺跡では 5,448 ㎡の調査面積で 2 点の貿易陶磁器が出土している。碗皿類に比べて白磁壺類の使用が高いという（八重樫忠郎 1997「輸入陶磁器から見た平泉」『貿易陶磁器研究』第 17 号）。平泉遺跡群では碗皿類の出土傾向は低く、袋物の壺類の出土傾向が高い。これは奥羽の他の地域の様相と相違する。

②13 世紀～16 世紀代の様相

この時期は山本信夫のＥ期～Ｇ期に相当する。Ｅ期は 13 世紀初頭～前半、指標とする陶磁器は龍泉窯系青磁碗などから組成される。Ｆ期は 13 世紀中頃～14 世紀初頭、指標とする陶磁器は龍泉窯系青磁碗、白磁碗、口禿皿などから組成される。Ｇ期は 14 世紀初頭～15 世紀前半頃、指標とする陶磁器は龍泉窯系青磁碗、白磁碗などから組成される。

北日本、日本海側ではＥ期～Ｇ期の陶磁器は比較的遺跡が少なく、一方太平洋岸は遺跡数が多い傾向がうかがえる。染付碗皿の時期になると日本海側に比べて、太平洋側と北日本の出土遺跡数が多くなっている。遺跡の出土量からすれば、太平洋側には出土量は少なく、日本海側と北日本には出土量は多い傾向がある。14 世紀代の陶磁器の様相は整理を加えなければならないが、基本的にはしだいに流通量は増加し、さまざまな遺跡にまで供給される実態を知ることができる。

③全体的な様相

以上概観したが、国産陶磁器と貿易陶磁器を総合（図１）しながら考えてみたい。繰り返しになる部分はあるが、まず 12 世紀～13 世紀（平泉藤原氏の時代とその直後）までの国産陶器の分布の様相を貿易陶磁器の分布と比較し考察してみたい。資料は東北地方の白磁の分布（図？）、須恵器系陶器（12 世紀代中心）の分布（図２）、龍泉窯系青磁碗１類の分布（図３）、龍泉窯系青磁碗Ｂ１類の分布（図４）、常滑（12 世紀代中心）の分布（図５）、渥美の分布（図６）である。

12 世紀代の白磁（Ⅳ類など）の分布は平泉を中心として濃密な分布を示している。これは根拠地平泉が最新の器の巨大な消費地であることを示すとともに、物資集散の中心地であるということをも示している。平泉藤原氏の拠点としての姿を考古学資料が明瞭に示しているものととらえることもできよう。さらに見てみると白磁は日本海側、太平洋側には散漫な分布を呈しているが、奥州藤原氏と関係が深い津軽方面、仙台平野周辺などはやや分布が濃いことも興味深い。これに後続する編年観を持つ遺物として、13 世紀代を中心とする龍泉窯系碗１類がある。この分布もまた平泉を中心とする分布を示している。白磁と龍泉窯系碗１類が奥州藤原氏に関わりの深い年代観を持つものであることは八重樫忠郎の整理のとおりである。

しかしながら、13 世紀龍泉窯系青磁碗Ｂ１類の分布図を見れば、この様相は変化を見せる。最大の変化は平泉を中心とした集中域の消滅である。これは平泉藤原氏の滅亡が原因の一つであろう。しかしながら、その他の地区の散漫な出土傾向は変化しない。平泉遺跡群の 13 世紀代の遺物の出土傾向を分析した八重樫忠郎によれば、13 世紀に入ると輸入陶磁器の出土量は 12 世紀代の 50 分の１に激減するという（八重樫忠郎 1996「輸入陶磁器から見た柳之御所跡」『中近世土器の基礎研究』Ⅸ）。白磁・龍泉窯系碗１類の分布域が平泉から奥六郡さらには津軽地方へと結び付いて展開していた分布域がこの時期に解消消滅するのである。これは、八重樫忠郎の指摘の通り、奥州藤原氏の勢力の解体によって生じた流通や社会様相の変化を示しているものであろう。

須恵器系陶器は日本海側に分布する。奥羽山脈を越えることは少なく、分布の中心は日本海側にある事がわかる。しかしながら、これ以外の地域、太平洋側にも分布を見せることがある。仙台平野から太平洋側にかけて、平泉から奥六郡にかけて、八戸を中心とする南部周辺、などに分布が目立つ。いずれも奥州藤原氏と深い関連がある地域である。常滑は須恵器系陶器と異なり太平洋側に分布の中心がある。日本海側の分布は２カ所のみであり、このうちの山形県尾花沢市の事例は経塚の納経容器に用いられたと考えられる三筋壷である。常滑は奥州藤原氏と密接な関係を持つ津軽地域にはほとんど分布しない。この地域では渥美が優位を占めている。注目すべきは秋田県本荘市大坪遺跡から出土した常滑２型式の大甕であり、少なくとも３個体は出土している。同じく本荘市土花遺跡からは渥美甕が出土している（本荘市教育委員会 2003「土花遺跡（第二次調査）」『本荘市文化財調査報告書』第 20 集）。これら本来は太平洋岸に主たる分布域を持つ常滑・渥美製品は、日本海側子吉川河口の湊から運ばれてきた可能性がある。あるいは逆に、この場所を通る街道は本荘から小友峠を抜け保呂羽山（延喜式内社波宇志別神）に至り、横手あるいは大曲へと抜けるため、平泉から陸上交通路を利用してもたらされという見方もできるが、大型の甕類が陸路を長距離輸送されるのは不便なことであろう。むしろこの地が平泉への重要な港湾機能をもっていたとみるべきかもしれない。

12 世紀代から陶磁器の流通は非常に活況を呈し、奥羽を覆うようになる。一部は北海道にまでその流通を広げる。日本海側の、余市町、上ノ国町では、珠洲Ⅰ期に編年される甕、四耳壷が出土している。貿易陶磁器の出土はこれに遅れるものの、12 世紀代の須恵器系陶器が分布することは重要である。興味深いことにこれらはいずれも袋物であり何らかの内容物が彼の地にもたらされ、さらにはこの地から何らかのものが盛んにもたらされたのであろう。おそらくそれらは、記録に見える「水豹の皮」などの北方の産物なのであろう。

山形県遊佐町大楯遺跡は 12 世紀の前半に成立し、12 世紀後半から充実し 14 世紀代まで連続する遺跡である。遺物には東北地方ではほとんど検出されない滑石製石鍋・瓦器椀・小型三足羽釜、スタンプ紋漆器椀、闘茶札などが含まれ、遺跡が流通の拠点であると同時に巨大な消費者であったことを示している。流通の拠点を示す資料として「ほろは」木簡に注目することができる。この木簡は「ほろは」と記され、これは「保呂羽」ともいい、鳥の左右の翼の下に生えそろった羽のことであり、特に鷹のものは矢羽として珍重された。これは 12 世紀代にこの地にあった荘園「遊佐荘」の荘園年貢である「鷲羽」を想起させる。この地域は列島最北の荘園「遊佐荘」の置かれた地域であり、時期的に併存する遊佐荘との関連を無視することはできない。流通拠点としての遺跡の姿が見える。

Ⅲ　まとめにかえて

変化の様相を遺跡の分布図に重ねると、次の時期に遺跡の分布傾向に差異を見いだすことができる。１期：12 世紀を中心にした時期、２期：13～14 世紀を中心とした時期、３期：15～16 世紀を中心と

した時期となる。こうしたことは、この地域の政治的状況に連動する傾向性がある。1期は奥州藤原氏の時期に重なり、奥州藤原氏が広大な北方世界を支配していた時期である。この時期の遺物の分布の中心が、岩手県平泉町にあったことは、ここが巨大な消費地を形成しさらには物流の中心地であったことを表象していると見ることができる。2期になると奥州藤原氏の勢力が、鎌倉幕府により解体され、これに変わって新たな流通の様相が開始されたと見ることができる。いずれにしろ、陶磁器から見た場合12世紀～13世紀にかかるあたりで大きな画期があったことがわかる。

＜青森県＞101十三湖、102仮山王坊、108酒田大畑、109内高館(4)、113浪岡城、114郡安平、117君沢(4)、121大光寺新城、123中崎館、124独鈷、125筑紫館、127早稲田、130大仏、131根城　＜岩手県＞201諏訪前、203土蔵まずの丘経塚、208台太郎、213山屋鉈経塚1号経塚、216北爪館、221高松山経塚群、224丹内山神社経塚西経塚、232伝豊田館、244寺の上経塚、254磯鶏館山、260平泉辺跡群　＜秋田県＞301矢立廃寺、302観音寺廃寺、312エヒバチ長根古窯、315秋田城、316盤若台、317中田館、327北、330手取清水、331館腰城、335大鳥井山、3003宮の下、3008曽城、3010内林、3025大畑、3027土花、3028大坪、3031前道　＜宮城県＞402田束山窯光寺、409花山寺、420一本柳1、421水沼窯跡、245飛龍寺城内、429多賀城、433荷小泉、440王ノ壇、444中田南、448大門山、455田町真、460大古町　＜山形県＞502大畑、503弁川、505蔵岡、519鳥居上、521七日台瓶墓群、532羽黒山頂経塚、535取上、538大森山経塚、543高瀬山、549立石寺2号経塚、565金原古城　＜福島県＞601松野千光寺経塚、603陣ケ峰城、610大戸窯跡群、611八郎窯跡群、614天王寺経塚、617勝口前畑、619安子島城、620荒井猫田、623越田和、625米山寺経塚群、628普光寺、633上ノ原経塚、634久世原城・善匠地、635白水阿弥陀堂、637柴川城、640昆沙門平窯跡・赤川窯跡、642馬場小路・馬場中路、653河俣城、658下方正寺

図1：　国産陶磁器と貿易陶磁器を総合した12世紀代を中心とする遺跡の分布図
＊山口博之2005「空間の考古資料論－遠佐荘大橋遺

図２：東北地方の白磁の分布

図３：須恵器系陶器（12 世紀代中心）の分布

図４：龍泉窯系青磁碗１類の分布

図５：龍泉窯系青磁碗Ｂ１類の分布

図６：常滑（12 世紀代中心）の分布

図７：渥美の分布

宇隆１遺跡発掘調査報告書
―北海道勇払郡厚真町―

発行日　2016年3月28日
編　集　宇隆１遺跡発掘調査団
発　行　科学研究費補助金「平泉研究の史科学的再構築」
（研究代表者　柳原敏昭）
印刷・製本　コンカツ印刷
〒021-0021　岩手県一関市中央町1-7-16
TEL0191-48-5964